

京都市基本計画審議会 第3回うるおい部会  
摘 録

日 時：平成22年1月27日（水）10：00～12：00

会 場：池坊会館2階ホール

出席者：

- |             |             |                                   |
|-------------|-------------|-----------------------------------|
| あさはら<br>朝原  | のぶはる<br>宣治  | 北京オリンピックメダリスト，大阪ガス株式会社            |
| あさり<br>浅利   | みすず<br>美鈴   | 京都大学環境保全センター助教                    |
| いけのぼう<br>池坊 | ゆき<br>由紀    | 華道家元池坊次期家元                        |
| いしだ<br>石田   | すてお<br>捨雄   | 株式会社京都環境保全公社取締役会長                 |
| いたくら<br>板倉  | ゆたか<br>豊    | 西京区基本計画策定審議会議長，京都精華大学人文学部環境社会学科教授 |
| ◎いぬい<br>乾   | こう<br>亨     | 立命館大学産業社会学部教授                     |
| えがしら<br>江頭  | せつこ<br>節子   | 弁護士                               |
| えんどう<br>遠藤  | ゆり<br>有理    | 公募委員                              |
| おぼた<br>小幡   | まさお<br>正雄   | 公募委員                              |
| おぼろや<br>隴谷  | ひさし<br>壽    | 上京区基本計画策定委員会委員長，同志社女子大学名誉教授       |
| ○かじた<br>梶田  | しんしょう<br>真章 | 本山獅子谷法然院貫主                        |
| はまさき<br>濱崎  | かなこ<br>加奈子  | 伝統文化プロデュース連REN代表                  |
| むらい<br>村井   | のぶお<br>信夫   | 各区市政協力委員連絡協議会代表者会議幹事              |

以上13名

◎…部会長 ○…副部会長

(50音順，敬称略)

## 1 開会

## 2 報告

### 第2回融合委員会の結果及び第1回部会の振り返り

#### 乾部会長

第2回融合委員会については、部会長である私と梶田副部会長が出席できなかった  
ので、報告は事務局にお願いしたい。

#### 事務局（大田総合企画局政策企画室京都創生推進部長）

第1回融合委員会においてワークショップの形で委員の皆様から未来像と重点戦略  
を出していただいた。これを受け、第2回委員会では、第1回で出されたアイデア  
を21のキーワードに分類したものを検討素材として、未来像を御議論いただいた。

その結果、資料1左側の①から④のカテゴリーにまとめられるのではとの結論に至  
った。具体的には、①「低炭素（温室効果ガスの排出量の少ない）の京都をつくる」、  
②「京都型経済モデルをつくる」、③「協力社会をつくる」、④これらの未来像の担い  
手となる「人材を育てる」である。

資料右側は委員会の流れをまとめたもので、まず尾池会長にごあいさついただき、  
宗田委員長の御説明の後、若者会議から御提案いただいた。その後未来像の検討につ  
いて、委員から活発に意見をいただき、先程のまとめに至った。

資料2は、1回目のワークショップのキーワードについて、どのようにまとめたの  
かを示した資料であり、議論の過程も確認いただけるものとしている。上部に、今回  
の議論で未来像として取り上げられなかったキーワードも点線で囲んでいるが、大き  
く4つの柱立てができた。

#### 乾部会長

資料2は、超高齢化時代の到来、地球温暖化の加速、低経済成長など、周囲から圧  
迫を受ける中で京都の内圧を高め、いかに対抗するのかを示した図と解釈している。

本部会は、様々なところに絡んでくると考えられる。「低炭素」については本日の大  
切な課題となっており、「協力社会をつくる」は、市民社会や文化・スポーツなどと密  
接に関連してくる。「経済」については、ベースになるものとして、まちづくりや文化  
が経済活動と結び付くところで絡んでくる。「人材を育てる」については、次の子ども  
たちに何を伝えていくのか、どう育てるのか、という問題との関連で御理解いただけ  
ればよいのではないかと。

前回の部会の議論は資料3にまとめている。全体としては、「文化、スポーツを切り  
口に市民生活をうるおいあるものにする」という、うるおい部会の哲学そのものを考  
えていこうとするスタートであった。

スポーツについては、社会貢献の中で、特に子どもをどう成長させるのかについて、  
朝原委員から意見をいただいたが、「子どもに伝える活動」やトップアスリートの育成  
も大切だが、地域スポーツ、地域社会が果たす役割についても議論され、直接的に子  
どもの安全・安心についても議論された。

文化では、大きな文化活動は京都の宝であり、発信源として様々な影響を与えてい  
くことになるが、「もったいない」「しまつの文化」「門掃き」などくらしの文化もある。  
文化について仰々しく考えるのではなく、暮らしそのものをうまく受け継いでいく側面  
についても語られた。

また、文化、スポーツについて、プライオリティの議論に乗せずに大切にしていかなければならないこと、その際には金を出すことだけでなく、地域からの活動も大切な点、あわせて、市についても取り組んでいる割には発信力が弱く、これらの両面から考えていかなければならない、といった点が話された。

これらの根底には、子どもたちに何を残していくのか、次の時代にどういう状況をつくっていくのかということがあり、その中で文化などが語られたのではないか。

融合委員会や前回の振り返りについて、質問や意見があればうかがいたい。

## 石田委員

文化をテーマとしていた前回の部会で、御欠席された池坊委員と茂山委員の御意見が聞きたかった。本日御出席の池坊委員から御意見を加えていただければよいのではないか。

## 池坊委員

本日は、池坊会館まで御足労くださり御礼申し上げます。横の六角堂は京都の「へそ」として「人」と「人」、「人」と「時間」、あるいは異なった価値観同士が出会う交流の場であったと思う。

私は生け花を仕事にしているが、文化の継承や文化的意識を次の世代にもってもらうことに非常に難しさを感じている。以前は家庭やお寺など、京都のまち自体が「人」と「人」をつなぐ機能を果たしていたが、最近はそれらが交わる機会とつなぐ人材がおらず、文化が一つの世代や場だけに切り離され、つなげて行くことができない難しさを感じている。京都は人材も豊富で、文化的な意識を持ってもらえる環境もたくさんあり、どうすればそれらを有機的につなげていくことができるのか、それぞれ単立しているものをつなげていく働きをしていかなければならないと考えている。

## 乾部会長

「つなぐ」との話があったが、議論をぶつ切りにするのではなく、本日のテーマの「環境」についても、我々自身が理解できないところで議論せず、様々な領域で、我々が共有せねばならない、我々自身をつないでいくものとして議論しなければならない。

## 3 議事

### 環境を切り口として

## 乾部会長

本日は環境が切り口である。京都市の現状等について事務局から説明願いたい。

## 事務局から以下の資料を説明

- ・ 次期京都市基本計画検討資料

## 乾部会長

「環境」という言葉で表されるものは広いが、議論の進め方についてお願いがある。都市計画の分野で「鳥の目、虫の目」という言葉がある。都市全体のまちづくりをどう進めるのかを議論する立場と、住んでいる人たちの暮らしや眼差しから議論する立場のいずれも大切であることを示す言葉であり、これは環境の分野でも共通してい

るのではないかと考えている。

本部会の最初に「わかる話をしよう」という議論があった。言っていることは素晴らしいが、自分はどうかなのか、について常に疑問符がつく議論を聞かされることがある。「鳥の目」の議論をどのようにして身近なところに引き寄せてくるのが、今後10年の中で非常に大切だと考えている。これらを念頭に自由な御発言をお願いする。

### 小幡委員

市民の感覚から申し上げると、目標値はよいと思うが、一市民としてどう取り組みばよいのかという具体的な取組がわからない。

私は平成18年のごみ袋有料化をきっかけに、有志の方と資源ごみの回収に取り組んでいる。例えば、平成19年度の1年間で、段ボール790kg、新聞紙3150kg、雑誌・雑紙1640kg、アルミ缶104kg、ぼろ布・古着360kgの回収ができた。

京都市から提案をもらって取り組んだが、このように具体的に提案してもらえればやりやすい。問題意識を持っている人は自ら取り組むが、一般の市民からすれば、高い目標があるものの、具体的な取組が目に見えてこない。

私自身は、昨年7月に車をプリウスに乗り換えたところ、毎月のガソリン使用量が3分の1程度に減ったことを実感した。例えば、市役所全体で蛍光灯をLEDに取り替えた効果を知らせるなど、具体的な事例で情報発信してもらえればわかりやすい。

目標値もよいが、市民が取り組むべき具体的な方法を出すことが必要ではないか。

### 石田委員

日本は「環境技術立国」と言われているが、今のままでは、世界の中で環境の主要国にはなれない。実際にスペインと比較すると、自然エネルギーの活用量は少ない。電気自動車の電池を生産しても自社ではこれらを活用せず、環境を商売道具に使っているのが日本の「環境技術立国」であり、これではいけないと感じている。

我々が環境で考えていかねばならないのは、いかに実践するかである。ヨーロッパでは緩やかに経済成長してきており、一つ一つ手を打ちながら進められるが、日本は急激に発展したため、色々なところで環境問題が発生しているのが現実である。今後、日本は、いかに環境問題に取り組むかという実践が重要になってくる。

そこで提案として、観光で活力を得ている京都では、国際観光都市と環境モデル都市の融合について基本計画に盛り込んでもらいたい。観光事業において環境問題に徹底的に取り組む、その実績を世界に発信する、これが京都の観光を更に発展させ、京都に活力を与えるものだと考える。是非ともこれからの10年で実現できないか。

その一例として、観光地のライトアップの電力は自然エネルギーにしたり、街路灯も太陽光発電にするなどが考えられる。また、交通手段についても、観光客ができるだけ車で来てもらわなくてよい方策、観光地では公共交通が利用できる施策を検討することや、旅館やホテルでは観光客が自分で出したごみをすべて分別し、リサイクルするなどが考えられる。こういった形で観光事業に取り組めば、国内でも世界的にも観光地における環境について、京都がモデルになり得るのではないか。

もう一つは、市民一人一人のライフスタイルを変えることである。通勤は歩いたり、公共交通を使うなど、自らのライフスタイルの変革に取り組むといったことに、きめ細かく取り組める施策を考えてもらいたい。

また、環境問題に取り組むに当たっては、三つの取組があると思う。まず、行政が社会のシステムをつくる、そして、個人ではなく自治会や企業など組織で環境問題に

取り組む、もう一つは個人が自らのライフスタイルを変えることである。京都市の環境政策に多くの記述があるが、この三つがわかる形で分類してもらえると、市民の取組が明確になるのではないかと。各々が何をすべきかについてまとめてもらいたい。

## 乾部会長

環境の観光化に関しては、環境実績自体を観光資源にすることもあり得る。そこまでいくと行政だけでなく、民間でも様々なアイデアを出していくことになるだろう。

## 遠藤委員

「エコ」という言葉が氾濫し、何が本当のエコなのかわからないことが多い。

市の環境イベントでプラスチックをリサイクルしたMY箸をもらったが、2回ほど使うと壊れてしまい、ごみとなってしまった。また、MYバッグがたくさん配られていたり、イベントでMYバッグがいっぱいになるほどの資料をもらう。環境やエコの取組のはずであるのに、配られたものをごみとして処理せねばならない。本当に環境にやさしいとはどういうことか、はっきりとしたものが必要ではないか。

ドイツの教育では、ミミズが入った水槽に様々なものを入れ、ミミズが食べるものは自然にかえるものであり、食べずに残るものは自然にかえらないものである。そのため、ビニールなどミミズが食べないものは買わないように、と教えている。「本当はどうか」と思われるものにまで「エコ」という言葉が使われていることに市民として疑問もあり、わかりやすい指針のようなものが出てくると取り組みやすい。

## 乾部会長

「環境」を「環境」として語るのではなく、子どもにとっては遊びや体験の世界を作り出さねば、頭でっかちで教えられてもしんどい部分もあるのではないかと感じた。

## 濱崎委員

企業ごみの在り方をきちんと考えねばならない。無理だとは思いますが、「京都市内ではプラスチックのものを絶対に使わない」というくらいのことを掲げてほしいと思う。衛生面から企業は食品をビニールで完全密閉しなければ販売できず、竹の皮の包装では売ることができない。行政の言う通りに取り組んでいるにも関わらず小さい企業は苦しんでおり、エコの取組ができない現状を真剣に考えるべきである。

やはり循環していくことが大切である。豆腐屋のおからなど、再利用することが日本の得意とするところであったにも関わらず、今では捨てねばならないために食べられるものがごみになってしまう。賞味期限が大きな問題になったが、食べられるのに何故捨ててしまうのか、ということに皆さん気付きつつある。衛生面、法律面、ごみの面などを切り離さずに解決していくことが必要である。

家庭ごみも多いが、企業ごみは更に多いのでその視点を入れておくべきである。我々は衛生に気を付けすぎて抵抗力がなくなっている。菌と一緒に暮らすところへ戻り、一人一人が味覚で確かめ、体力を付ければ、企業に対して「それは捨てずに食べられる」と発信することもできる。そうしなければ環境問題は解決しない。

また、京都は近郊農業が盛んで、近くの畑や田で子どもが循環について学んでいた。環境面に配慮し、京都では昔の風景を取り戻す取組を進めることが、実は環境政策や子どもの教育にもつながる。近郊農業の復興についても考えていただきたい。

道路の舗装について、すべての道路を舗装する必要はないと改めて感じている。幹

線道路は舗装が必要かもしれないが、小さい道路は、舗装を剥がすことを思い切ってやってみてはどうか。コンクリートの業者は困るかもしれないが、冬は暖かく、夏は涼しくなる。観光面からも、「京都は面白い」「そこまでやるのか」と思ってもらえる。京都しかできないことかもしれないが、過激な意見と思いつつ申し上げた。

## 乾部会長

企業ごみの在り方にとどまらず、様々な指摘をいただいた。わらづとで包んだ納豆はおいしく、高級感や付加価値にもつながるが、他人に譲り渡すのはよいが、売ってはいけないこととされている。おからの再利用は、現在では採算が合わずに止めているところもある。例えば「再利用」、「紙、竹、木、土しか使わない」などをうまく京都ブランドとし、付加価値を付けられれば、市民の誇りや自分たちの経済活動につながるかもしれない。

子どもたちに土に触れさせるとの話があったが、我々の頃は土に落ちたものは食べても大丈夫と言われていた。そこへ戻れとは言わないが、そういった話も大切である。

## 浅利委員

環境教育に京都スタイルでどう取り組めるのか、真剣に考えてみたい。日本では単純な知識を教えていることが多いが、先ほどのドイツの例では考え方や判断の仕方を分かりやすく教えている。この点が今の日本の環境教育に欠けている。

京都には生活に蓄えられた知恵も十分あり、コミュニティの力、京都ならではの人のつながりで蓄えたものが力を発揮していくと考えている。「環境教育」とは、持続可能な社会を実現するための教育であると、世界的に共通認識が持たれている。環境モデル都市として世界に発信する京都スタイルの環境教育が考えられないか。

ものやエネルギーを削減する一方で経済をどう成り立たせていくのかが重要になっており、少しの資源でもよいものを判断して買える目利きを育てていくことが大切である。そういう意味では京都には本物があるので、よいものに触れて、目利きを育てることは、環境やごみに関しても有効だと思う。

環境面では定性的・理念的なところだけでは逃げられない面があり、CO<sub>2</sub>排出量やごみの量に関わる話になってくる。京都には小さな事業所がたくさんあるために、一般廃棄物の中でも事業系のごみは多くなっており、事業系ごみへの取組は大切である。ただし、家庭ごみについては他都市と比較するとかなり少なくなっており、まだ家庭に「もったいない文化」が息づいていると感じる。そこには自信を持ちつつ、事業系ごみを減らす点に知恵を絞る必要がある。家庭ごみもまだまだ減らせるとは思うが、具体的な現実を知らせることも必要である。

CO<sub>2</sub>について、京都市と全国の部門別の排出量は、割合が異なっている。家庭からの排出量は人口で割り、一人当たりの数値として比較できるようにしてもらいたい。

合わせて、可能な限り世界とのベンチマーキングをしてもらいたいと思う。京都議定書のまち京都では、世界も眼中において比較してもらいたい。

京都だから思い切って、という部分では、歩くまちに対してどこまで取り組むのか、地下鉄など公共交通ネットワークの変革など、私は全面的に推進していきたいが、市の職員の覚悟も聞いてみたい。

## 乾部会長

環境教育における京都スタイルには、具体的なものも含めて詰めていけば面白い。

消防では火事の少なさをアピールされるが、家庭ごみが少ないことも自慢すれば、小幡委員のように実際に取り組んでおられる方が話をされる、そういった構造も大切。一人当たりの排出量や世界との比較など、市民がどの程度がんばっているのかについては答えていただきたい。

京都市の取組として、市の覚悟の話も出されたが、市民のコンセンサスづくりと並行して出さねばならないと思う。

## 龐谷委員

本日の会場である池坊会館建設の際、発掘調査に携わっていたため思い入れがある。前回の部会を欠席したが、この会議は議論の進展が早い。環境に関して勉強しようにも資料が多すぎる。資料を整理し、問題点や議論すべき点を教えていただきたい。

私は環境と観光は相反すると思う。環境は近代化が進むほど変えていかねばならないが、観光は昔のものをできるだけ残して見てもらうものである。融合できればよいが、これらは相反する要素であり、融合させるのは難しいと思う。

京都は「水、木、竹、土」を原則とすべきということには賛成で、道路を土にすると、雨は下に沈み環境にもよい。土の道を歩くこともブームになっている。

私は納豆が好きで、昔はわらに包んであるものしか食べなかったが、最近は見かけない。最近はおなかを壊すと賞味期限などの話になるが、納豆はもともと腐っているものであり、神経質になりすぎている。少しは自然に帰った方がよい。

## 乾部会長

私も環境については詳しくないが、知らない側からの発言も大切だと思っている。

「水、木、竹、土」は大切なキーワードだが、「市民が選んだ時に」ということが常について回る。舗装を望んだ時代が間違いだった、となるとおかしなことになる。そういった点を議論する場が必要で、それが市民参加につながっていくのではないか。

## 小幡委員

環境と観光の両立が難しい、だからこそ取り組む意義があると考えられる。

シンガポール、ベトナムのホイアン、スイスのベルンでは歩いて市内見学が可能なような公共交通機関が発達している。京都市はパークアンドライドが成功したと聞いているが、これを一步進め、市内に入るには切符購入制度を導入し、その切符で駐車料代わりとして駐車を無料とすることも考えられる。このような取組を進めることができれば環境と観光が両立すると思う。

また、京都への観光客は近畿圏からの人が多いため、車で来る人も多いと思われる。どの路線からの車が多いのかを調べ、その路線に駐車場を整備しなければならない。

私は京都駅をよく利用するが、市バスの乗り方がわかりにくいため、多くの方が乗り場を尋ねている。この点に配慮するとバスや地下鉄の利用者が増えるのではないか。

四条通の歩道拡幅についても、更に情報発信する必要がある。議論が沸騰するような課題を提言していかねばならない。行政だと言にくいことも、このような審議会から発信し、市民の意見を聞いて取り組んでいくことができないか。色々な新聞が取り上げ、話題になるような思い切った政策を出すことによって、京都らしさが出るのではないか。私自身は環境と観光を両立させることが京都らしさだと考えている。

## 板倉委員

私が入っているNPO法人「環境市民」ではエコツーリズムに取り組んでいる。中高生が御所の自然を見たり、鴨川で水質調査や水棲生物を観察したり、嵐山のごみの組成を調べるなどのプログラムがあり、一度体験した学校から再度の要望があるなど需要が高い。エコツーリズムには地域の伝統や産業、文化を育てることと、住んでいる人の生活をサポートする概念も含まれるのもっと普及すべきである。

交通手段については、LRTを導入することも考えられる。以前は網の目のように市電が走っており、私は廃止の際に座り込みをしたこともある。京都市は低床の市電を廃止するという失敗をしたが、これを反省し、身障者や高齢者でも乗車できる低床低公害の交通を導入すれば、乗りに来る観光客も増える。

また、鴨川にはたくさん水鳥がやってくる。深泥池にもコハクチョウがやってきた。深泥池は考古学的、生態学的にも貴重であり、あれほど小さな池に60数種のトンボが生息しているところはなく、そういったところも脚光を浴びていない。

バスについても、すべての車両を低公害車にすることも考えられる。京都で市バスに乗れば、天然ガスやハイブリッドなど、色々な低公害車に乗ることができる、学習もできるという取組にもつながり、可能性は大きい。

環境と観光はうまく結び付くと思うので、積極的に取り組むべきである。

## 乾部会長

京都はエコツーリズムに取り組みやすいのではないかと。体験的に学ぶことと合わせ、地域にとってもコミュニティビジネスとつながり、地域も誇りを持つことができる。

色々なバスを走らせて、乗ったかどうか話をするのも面白い。車好きの子どもたちは喜んで、バスの利用率は高くなるかもしれない。

## 村井委員

現行基本計画に環境に関連する政策が掲載されているが、市民にどれだけ理解されているのか疑問に思う。我々も以前は環境について興味がなかったが、住んでいる醍醐地域に東部クリーンセンターや下水処理場建設の話が持ち上がり、反対運動に取り組んだ。その際に公害やダイオキシンなどこれまで聞いたこともなかった科学的なことについて学び、苦しみの中から、環境の大切さについて身をもって体験してきた。

従って、ここで出されていることについて、市民が理解し、安心して暮らしていくことができる社会づくりに対して、この場で答申を出して役割が終わった、とするのではいけない。我々醍醐に住む市民は、身をもって環境の大切さを体験してきたことから、年に1、2回、行政と環境問題について話し合う機会をもっている。ここに記述されている内容を外に出していく際には、市民にわかってもらう必要がある。日本で初めてコミュニティバスが走ったことも、市民が環境問題を通じて地域の発展のために関心を持ち、団結することができていたからこそである。大事なことに對し、市民にどう取り組んでもらうかを考えるべきではないか。

## 乾部会長

市民の暮らしから発想せねば、「あるべき論」や市がどうすべきなのかという話もごまかしになってしまう。市の政策で起こった問題について市民が何を語ったのかを整理して返していく必要がある。一般的な暮らしの中で起こる議論がされがちだが、局所的な矛盾が出てきた時の市民の反応やどう向き合ったのかという資料は私も欲しい。

## 江頭委員

本日の論点として、哲学や価値観が出されているが、これまでよいものとして追求されてきた便利さや快適さ、個人主義など、多くのものが環境保全の面からはマイナスに働くことになる。

例えば、個人主義が進み、暮らしの単位も1～2人暮らしが増えた。京都は学生のまちということもあり、そもそも1人暮らしが多く、離婚率も高く、これから高齢化も進む。昔であれば大家族で、白菜1個まるごとを購入していたが、今では小分けで購入している。やむを得ない面もあるが、売る側も個装に対してプラスのイメージを出し、消費者もそれに飛びつく形になっている。こういった形に対して、環境面ではマイナスであり、「反エコ」である、というメッセージを突きつけていかねばならないのではないか。プラスとマイナスを逆転させる価値観のアピールが必要である。

個装も文化として発達してきたが、今後は見方を逆にしてはどうか。不便で、不快で、個人主義とは逆に他の人と交わることで節約する、そういう昔に帰っていく、こういった点がマイナスのイメージで語られると広告としては失敗になるので、うまくプラスのイメージと結び付けて市民にアピールする必要がある。

自転車利用は、公害をなくす面からもよいことであるが、自転車に乗る人間にとっては駐輪場がないという問題がある。駐輪場については一層の努力を願いたい。私は、大文字山に登ることが趣味だが、先日、公園の中に自転車を止め、山に登って帰ってくると警告の札が付けられていた。放置すると盗まれる、という親切な警告かとも思ったが、駐輪禁止の表示があるわけではない。自転車を推奨しても、止めると警告されるのであれば、どこに乗っていけばよいのか。道路に駐輪しては本末転倒になる。

また、京都御所も自転車で行きやすいが、中は砂利敷きで走りづらい。市の所管ではないが、砂利を一部よけてもらえれば走行しやすくなり、子どもと共にサイクリングができ、自然に触れることもできる。自転車に乗る人間に配慮をしてもらいたい。

## 乾部会長

価値観の問題は非常に大事であり、京都の暮らしの文化もまだ残っている。押し付けではなく、おじいさんおばあさんからうまく伝えるようなことも大事かもしれない。

## 池坊委員

物事は最初に知識として知り、自分がいかに動くかという実践に入ると思う。

池坊では「もったいないプロジェクト」というものに取り組んでいる。これは、飲食店や生徒から集めた使用済みの割り箸を構築して生け花をし、展示後は再生紙や、肥料にして花を育てるというプロジェクトである。生け花をはじめ、日本の文化は環境に関係しており、それぞれの立場ででき得るエコの取組を考えていこうとしている。

今の小中学生は、どう捨てればごみが小さくなるのかがわからないため、ごみの減らし方から説明しなければ伝わらない。これからの学校教育の在り方とも関連するが、言われたからではなく、子どもが環境を考え、ごみを減らす際に能動的に自分で考えて実践できる習慣付けが大切である。

ただ単に減らすだけではなく、何故このようなことに取り組むのか、取り組むことで今後どのように未来につながるのか、一つの行動だけでなく、過去から今に至るプロセス、そして自分達の行動が未来につながる流れを訴えることも大切ではないか。

歩くまちの話も出されていたが、京都は五感というか実感を大切にしながら知恵で生きていくまちである。車を抑制して歩くことで見える景色や感じる思い、土を踏ん

だ足の感じなど、実感が一人ひとりに与える充足感が大きい。その積み重ねが、京都のまちとしてのうるおいや華やぎにつながっていくのではないか。

環境問題はごみだけでなく、教育や地域のまちづくり、防犯にも関わってくる。環境を切り口にいろんな分野に派生できるジャンルだと思うので、うまく活用して地域力のアップや地域の連携、人間関係の構築などに結び付けることができればと思う。

## 乾部会長

生け花に使って肥料にして花を育てるといった話のように、自らの行動を真ん中に置きながら環境問題に取り組む流れを作っていくというのはとても大事だと思った。

環境と防犯について、窓が割れているところでは犯罪が発生しやすいという「割れ窓理論」の考え方があるが、積極的に防犯に結び付けるというより、自分たちのまちを誇りをもってきれいにしているという、ごく当たり前の話からスタートするということかもしれないと感じた。

## 朝原委員

環境というと地球規模の話で、普通の生活をしていて困ることもなく、実感できない点が問題である。未来のことについて、人が自制して何かに取り組むことは非常に難しいことだと感じている。これはスポーツも同じで、健康を害して初めて健康的な生活をしておけばと感じるのが人間の性である。環境についても、意識の改革か、子どもの頃の教育でしか、個人のモラルは変えていけないのではないか。

本来、環境にやさしいことをするのは当たり前で、ビジネスや観光に結び付けるのはおかしな話だが、そうも言ってもらえないのが世の中である。私はエネルギー会社に勤めているが、エネルギーを使ってもらわねば企業も生き残っていけない。矛盾した世の中で、各自が意識を持つことは難しいが、やっていかねばならなくなっている。

自分自身が環境に対する取組で実践していることは少なく、マメに自転車に乗ったり、風呂の湯が冷めないように蓋をしたり、電気を消し忘れないなど一般的にできることしかできない。何ができるのかを示してもらったり、小さくてもできることから取り組んでいくことが大きなことにつながるのではないか。

## 乾部会長

健康と自制の話という例えは非常にわかりやすい。一人ひとりがやっていることは矛盾に満ちており、自分の価値観として自制してやっていく、本当は大切だが、ビジネスや政策などに縛っていくこと自体が問題ということは共感できる。

その中でできることについて、以前に海外の哲学者の本の中に「プラグを外す」という言葉があった。大きなことはできないが、コンセントを外す、車に乗らないなど、できることを一つくらいは持とう、ということであり、こういった話にも通じる。

## 梶田副部会長

「自然エネルギー」という言葉は怪しいと思っている。なぜ風力や太陽光、バイオマスだけが自然エネルギーで、石炭や石油、ウランは自然エネルギーではないのか。日本人は「自然」という言葉を好きなように使っており、自分たちは自然に沿った生活をしているという意識があっても、必ずしもそうではないといつも感じている。

市民に意識を持ってもらうには、分別に徹底的に取り組んでもらうしかない。しかも家庭単位ではなく、地域でできる仕組みを早急につくっていただき、例えば小学校

を核として、地域で関わり合いながら、ごみ問題に取り組んでいくようなことができないか。分別したごみは子どもに学校まで持たせるなど、地域でできることがあれば意識も変わっていくと思う。

エコツーリズムについて、鴨川や御苑など京都の生き物との触れ合いという形で進んでいるが、京都市は環境モデル都市と言いつつも水族館をつくらうとするなど、危惧する面もある。おっしゃることと政策の実行との整合性が問われることになり、市民を本気にするためにも京都市の本気を見せてもらいたい。

こういった会議の場に市議員にも来ていただき、聞いてもらいながら考えていくことがあってもよいのではないかと。

## 乾部会長

「自然」を好きなように使っているというのは、その通りだと思う。

市としての整合性については、対話をどう展開するのかということである。ただ、市議員を呼ぶと同じような人ばかりがやって来て、対話する方も同じような人ばかりという問題もあり、どう乗り越えるのかという市民参加の議論にもつながる。

## 小幡委員

京都市が他都市と比較してごみが少ないという話が出たが、要するに「これだけ減ってきている」という「見える化」が大切である。京都市はよいホームページを持っておられることもあり、努力した甲斐を「見える化」すればよいのではないかと。例えば地区別の取組について「見える化」すれば意識も高まると思う。

もう一つは、ごみの減量化のために市民しんぶんをWEB化し、WEB化した人に特典を与えるようなことも考えられないか。WEB化した市民の数や環境会計などの様々な取組を「見える化」できれば具体的な事例として派生していくと思う。

## 乾部会長

「見える化」「特典化」も大切な論点である。

子どもに限らないが、山や近郊農村、水、伝統的な建造物などに触れながら育つことが大事だと考えており、これに関連したアイデアや論点があればと思っている。京都には、まちなかだけでなく、近郊農村地域や中山間地域もある。これら自身も、都市文化と関連しながら面白い発展を遂げてきたところである。地域の生き残り戦略、誇りづくりなどをうまく使いながら子どもが育つ、といった具体的な方向性も欲しい。

## 梶田副部会長

修学旅行生が来て、哲学の道で環境問題について考えながら生き物に触れ合うことを頼まれることがある。修学旅行や観光客と組み合わせて京都から環境について発信することはすぐにでもできると思う。

また、人材育成も必要である。京都は自然環境に恵まれている地であり、これを生かさない理由はない。20年続けるとそこで学んだ子どもたちがリーダーになっている。人の教育としても成果を挙げていくのではないかと。京都市全体で環境に詳しい人材を育て、エコツーリズムとも結び付けていくことも考えられる。

宣伝になるが、2月1日20時からNHKハイビジョンで法然院の生き物が紹介される。よろしければ御覧いただきたい。京都の環境がわかっていただけたらと思う。

## 朝原委員

子どもの育成について、大阪ガスでは「食育」として親子クッキング教室などに取組み、料理や栄養に興味を持ってもらっている。また、昨日、農林水産省の「ごはん給食紀行プロジェクト」に参加した。お米を育てる体験をして、どのようにしてお米が育ち、どのような手間が掛かるかについて、子どもたちが理解することで、御飯の大切さについても理解できる。そうすることで食べ物を粗末にせず残さない子どもが増えると、残飯や生ごみが減り、エコにもつながるのではないか。

## 隴谷委員

京都は周囲に自然が多いことが特徴である。先日、散歩の際に偶然、母子の会話を耳にした。2人が鴨川の遊歩道を歩き、比叡山を見ながら、子どもが「京都は山と川がきれいだね」と言ったので感心したが、母親が「そう？」と言ったのを聞いてがっかりした。

子どもは現場を見せると認識する。教育委員会には、京都の小学生は少なくとも年に4回、春夏秋冬の鴨川や高野川、桂川などを見せて歩くことを提言したい。それだけで子どもは京都の自然の美しさを感じ、自然を汚してはいけないという教育にもつながる。教室で学ぶよりもっと得るものがあるはずであり、美しさを実践で知らせれば、子どもは将来心が豊かになり、それが古典への導入にもつながると思う。

## 乾部会長

「環境教育」という言葉は、ある意味で狭義にとらえられがちであり、別の名前があるのがよいと思うが、大事なキーワードである。単に環境問題として論じるのではなく、それぞれの地域ごとに誇りを発見できないか。大原野などが最近取り組んでいるが、誇りを子どもたちに伝えていくことが自分たちのまちや自然を大事にする、土に触れる、という話にもつながる。そういうものがベースとして大事な部分だと感じた。

地域の農業の見直しについて、残飯を出さないことも大事だが、地産地消で身近なものを食べる構造ができれば輸送費も減少し、食糧難でも少しはましかもしれない。自給率の議論にもつながるのではないか。

一人ひとりが大げさな話をする必要はないが、むしろ自らの地域で遊ぶ、触れる、ということが環境教育になる。わらづと納豆を食べてみるということも考えられる。

## 石田委員

京都市は環境モデル都市になっているので、京都新聞に環境欄をつくってほしいと記者に話したことがある。市民しんぶんにも環境のことが出ているが、他の地域から京都に働きに来ている人は読むことができない。京都新聞には文化、スポーツ、経済、社会、政治欄がある。市からも働き掛け、そこに環境欄を加えてもらいたい。

## 乾部会長

その場合は「環境」について広くとらえつつ、身近なところに落としていくことが大切で記者の力量が問われるところである。

今日の議論を簡単にまとめると、「つなぐ」という言葉が、この部会では何度も出てくる。市民生活を考える、市民一人ひとりを考える中で「つなぐ」という言葉は一つのキーワードであると考えられる。

また、「できることを考える」ということが本日の基調にあったと思う。具体的な取

組を提示し、具体的に考えたい、との話があった。回収する方法をきちんと見せ、その成果を誇りとして情報提供し、京都のごみの少なさをメッセージとして発することも必要である。また、もったいないプロジェクトのように身近なものとして取り組みやすい形とする方向も語られた。

環境の観光化について、「難しい」という指摘や「エコツーリズム」の話も出された。観光で稼げればよいが、ある種の誇りを取り戻す、あるいはそれ自身が誇りとなっていく側面も含まれているのではないか。

京都は「竹、木、土、水しか使わない」、「歩く」といった話についてきちんと考えていくことが経済活動や誇りづくり、地域コミュニティと関連しながら動いていく考え方もあるとの話もあった。ただ、これは上からの押し付けでなく、一人ひとりの価値基準や自制の中に存在するべきものである。一方で便利さを求めてきたことを全否定しても仕方ない。そこにコンセンサスづくり、市民参加を忘れてはいけない。

京都ならではの環境教育、子どもたちやその親も含めて伝えていく方法を編み出すことができれば意味があるのではないか。「ねばならない」「べき」ではなく、身近なところで尊さや良さに気付いてもらう、知ってもらう、体験してもらうことを仕組んでいくのは教育の話になる。土に触れることなど、遊びや体験に潜む大事な部分について教育分野でよく言われることだが、子どもの時代は知識として覚えるより、まず全体として感じてしまう、これは子ども時代に最も培われるものだと思われる。緑の良さに対する感覚を子どものうちに育てるのは大切な話だと思っている。

エコツーリズム、環境学習というキーワードはその辺りまで広げて考えたい。

京都はそれぞれの地域ごとにそれぞれの環境を備えた魅力的な場所があり、それらを見直しながら、環境学習について、オール京都だけでなく、それぞれのゾーン、地域、コミュニティごとに展開していくことも必要ではないか。

次回の市民生活、コミュニティの議論や、前回の文化、スポーツの議論と重なる辺りを充実させていくこと自身が環境を考えていく上での基礎体力になると思っている。

できること、限られたことと合わせ、ベースとしては市民の暮らしがある。市民の暮らしから離れて概念的に「かくあるべし」と語るのはおかしいことになる。

だとすれば、これまでの京都市の環境政策や市民との摩擦についてもきちんと拾い上げて、何が語られたのかを学びながら、市民にこたえられる動きをしていく、という基本的な姿勢についても語られたのではないか。

今回はこういった話を受けつつ、市民生活についてお願いしたい。

傍聴の方がおられたら、一言お願いしたい。

——（傍聴者意見なし）——

——（事務連絡）——

#### 4 閉会